平和願い祈る八月

一字一筆　静岡の今

八月は「祈る月」である。6日（広島）、9日（長崎）と「原爆の日」が続き、15日の「終戦の日」を迎える。その3日間は、それぞれの追悼式典に参加する人はもとより多くの人たちが戦火の犠牲者に心の中で祈りを捧げ、平和への願いを新たにする。お盆休みで故郷に帰省する人たちの多くも、墓参りして家族の健康などを祈る。

八月の祈りを代表して政府主催の全国戦没者追悼式が15日、日本武道館（東京）で行われた。令和最初の式典には、即位したばかりで戦後生まれの天皇皇后両陛下も出席され、追悼と平和を祈るお言葉を述べた。

この日、全国各地ではそれぞれの地域主催の慰霊祭が行われた。県都・静岡市のグランシップでは「戦没者を追悼し平和を祈念する式典」があった。第一部で戦没者の遺族らによる慰霊法要が営まれた後、第二部では小、中学生が発表や郷土唱歌を披露して「平和へのメッセージ」とした。グランシップに近い県護国神社では13日から3日間「万灯みたま祭」。夕方から境内を埋め尽くす提灯に明かりがともされて、静岡県と縁故ある戦没軍人7万6230柱の英霊供養が行われた。

お盆の慰霊は、忘れられない事故を思い起こさせる。1985（昭和60）年8月12日、群馬県・御巣鷹の尾根に墜落した日航機事故である。羽田から大阪に向かうお盆の帰省客520人が死亡し、単独の飛行機事故としては世界最大の惨事となった。朝日新聞社会部記者として現場取材した筆者は、お盆になると当時の取材仲間と何度か「慰霊登山」した。今年も命日の8月12日、遺族ら80家族276人（日本航空調べ）が慰霊登山したという。

御巣鷹の尾根は、鎮魂のせみ時雨に包まれている頃である。せみ時雨の主役もクマゼミからヒグラシに変わった。朝夕の「カナカナ」という澄んだ鳴き声に、秋の気配が漂っている。

（前静岡県監査委員・富永久雄）

県護国神社の「万灯みたま祭」＝静岡市葵区、全日写連・望月導章さん撮影